第452号 昭和58年 2 月 20 日発行（毎月 20 日発行）
昭 和 49 年 8 月 31 日 第三種郵便物認可

1983年（昭和58年）
2月号（No. 452）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

図書カード目録の完成にあたって
図書委員会……（1）
東北の山旅 ……望月達夫……（2）
―海外の山から―
厳冬期のヒマラヤ登山 ……（2）
ナンガ・パルバート柱状東岩稜
登頂 1982
ヘルリッヒコッファー遠征隊 ……（2）
図書紹介 ……（5）
「親と子のネパール探険」「径―
折元秀穂」「エベレスト西稜」
「種蒔きうさぎ」
<科学研究委員会講演会>
山はどうしてできたか
講師　藤田和夫氏 ……（6）
報告　「比良地形探索山行」
「秋山山行・御在所岳」「北海道
支部忘年会」 ……（6）
日山協推せん状取得手続きに
ついて（つづき） ……（8）
会務報告・ルーム日誌・会員移動 …（9）
お知らせ …… （10），（11）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

図書カード目録の完成にあたって

図書委員会

このほど図書室で所蔵している図書のカード目録が完成した。

図書委員会では、所蔵図書の管理の徹底と利用者の図書検索などの利便をはかるため、所蔵図書のカード目録を企画し、昭和五十六年度からその作業をすすめてきた。

これらの事務作業は、きわめて専門的かつ技術的なので、図書委員会の岩渕泰郎氏にお願いし、専門家の立場から事務作業全般にわたり最後まで総指揮をとっていただいた。

またこれに要した経費については、「図書出版研究基金」の運用の任にあたられる方々のご理解により、この基金から支出を承認していただいた。

なお図書委員会では、引き続きこの制度の拡充と改善に一層の努力をいたす考えであるが、このカード目録が本来の機能を発揮し、有効に維持されるよう利用者各位のご協力を切にお願いする。

（担当理事　松家　晋）

＊

図書カード目録の概略と使い方

このたび図書のカード目録（以下「目録」という）が完成したので、その概略をおしらせします。

このカード目録は一図書を一単位としてつくられていますが、全集のように多くの著作が含まれているものは内容のおのおのからも検索できるようになっています。

一、目録の構成

目録は、図書の著者名、書名、版次、出版社、出版年、ページ数、大きさ、などの書誌的事項を記載したカードを排列してつくられています。カードの最上部にローマ字で個人名か団体名が記載されているものが著者名カード、書名が記載されているものが書名カードで、それぞれのカードをアルファベット順に並べたものが著者名目録、書名目録になります。和書（本文が日本語のもの）と洋書とに分けて編成されています。

目録の種類にはこのほかに分類記号順にカードを並べた分類順目録と山名等のカード索引のファイルとがあり、また主として目録の維持管理に用いられる事務用基本目録があります。

(1)著者名目録（和書・洋書別）

著者のほか訳者、編者、挿画家、被伝者等の名前からも検索できる目録です。洋書はもちろんですが翻訳書についてもこの部分の西洋人名は原つづり形を採用しています（片かな形からの参照カードは作成の予定。）

個人名は「姓、名」の形で記載されています。名前のローマ字が全部大字の場合は主題としての個人を表わし、同一著者の著作のあとに排列されます。

(2)書名目録（和書・洋書別）

図書の書名から探せる目録で、排列および検索のための手がかりとなるローマ字の部分は、和書ではヘボン式ローマ字で適宜に分けて書かれています。ただし、排列そのものは全部が一続きのものとして並べられています。また、和書の書名中に外国語・外来語が含まれているとき、人名・地名等の固有名詞があるときは、原則として原語形を採用しています。洋書で書名の冒頭に冠詞があるときは冠詞の次語から字順で排列されています。

(3)分類順目録（和洋書混排）

図書はすべて「日本山岳会図書分類表」に基づいて分類されていますが、この目録中のカードは分類表の体系（記号順）に従って並べられています。

分類表は小数による十進法の記号を主体に、アルファベットの小文字を補助記号として使用して、最初に山以外の一般図書（最初の二桁がゼロ）、次ぎに山岳・登山関係図書（地誌・旅行に関するものを含み、最初の一桁がゼロ）、最後に特定の山に関する図書（最初の記号は1から9）の体系となっています。表の中心は最後の山岳分類表で、主要な山にはすべて固有の記号が与えられています。例えば、エベレストは 221、マッターホルンは 614.2（三桁目に点を付す）となります。また、この部分については共通補助分類表（a／案内書、b／登山記録・記録、d／山と登山の歴史、m／写真集など）を適用して二段目に該当する記号を与えています。これによって一つの山または山域に関

留守番電話（電話番号03―六六五九）

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

する図書は、一つの分類記号に集められています。

分類記号カードは、著者（編者は含まない）が三人以内の場合は最初の著者名が最上部に記載され、四人以上のときは原則として書名が記載されています。

分類記号または補助分類記号の下には著者・編者等の姓の頭文字を付してありますが、同一記号内の複数カードの排列はカード最上部に記載されている事項のアルファベット順です。

(4)山名カード索引

分類順目録で特定の山または山域に関する図書を探したいとき（直接書架上で探す場合も同様）にその山がどこに分類されているかがわからないと検索に手間どります。そのようなときにこのカード索引で山名のカードを引くと該当する山の記号が簡単にわかります。

山名カードはローマ字のアルファベット順です。

(5)事務用基本目録（和洋書混排）

これまでに挙げた目録は一般に利用されるものですが、この目録は主として事務上の目的で使用されます。和書と洋書のカード（一図書に対して一カード）を最上部の記載事項のアルファベット順に混合排列してあります。同じ著作の原書と翻訳書のカードが並んでいますし、同じ図書に何冊かの複本があるときにそれぞれの登録番号がわかるようになっています。

以上が図書カード目録の概略ですが、詳細な使い方については図書室に用意してありますのでご利用ください。またご不明の点があれば担当者から説明いたします。

（岩淵泰郎）

東北の山旅

望月達夫

昭和五十五年十月二十五日から十一月三日まで、牧野衛さんと九州の山々を歩いたことがある。その時は熊本支部の西沢健一、本田誠也、奥野正亥、和仁古昇、大木野徳敏氏ほか数名の方たちにひとかたならぬお世話になり、涌蓋山由布岳、韓国岳、高千穂峰、国見岳、雁俣山、仰烏帽子山、市房山尾鈴山などに登ることができた。しかも九日間晴天に恵まれて、そのときの思い出は、いまに忘れがたく残っている。お世話下さった西沢さんらへの感謝の気持を、大変遅ればせながら、ここに書きとどめておきたい。

このときのよい思い出が忘れられず、今年（昭和五十七年）の秋岩手支部の佐藤敏彦さんから東北の山への誘いをうけたとき、私は

――海外の山から――

厳冬季のヒマラヤ登山

厳冬季ヒマラヤ登山は今季（一九八二年十二月～八三年一月）も明暗を分けて終幕した。北大隊がバルンツェ（一九八〇、八一年）からダウラギリ主峰（北東稜、十二月十三日小泉隊員ら）と冬季初登頂の記録を八〇〇〇㍍の大台に乗せると、二週間後の二十七日、加藤保男隊長は単独エベレスト（南東稜）に登頂、日本隊の手で二つの記録更進がなされた。が、加藤隊長と小林利明隊員はその夜の南峰でのビバーク以後消息を断った。加藤隊長は春、秋、冬の三シーズンのエレベスト登頂に成功したのだが。

冬季、ヒマラヤ、チベット山系の南縁にまで押し出すジェット気流は毎秒五〇～六〇メートルにも及ぶ。高々度の気温と勘案すると体感温度だけでも想像を絶する。加藤隊の場合、C4から頂上への往復を二十四時間とみたが、実質的には十四時間の酸素量だけだった（補給は拒否している）。南峰でのビバークの地点で、気象的な悪条件に加えて、補給酸素の不足は経過とともに致命的なものになったろう。メスナー、ハーベラーのエベレスト無酸素登頂の際の疲労困憊ぶりからも容易に推測できる。

一九八〇年エベレスト西稜からの無酸素冬季登攀を試みた英隊タスカーは、ルート上での雪崩、落石の危険はないものの、風の恐怖に悩まされ、「春ならば日照によって暖も取れるが、二六〇〇〇㍍以上では寒気を防ぐ手立てはない、急速な体力減退のみ」と表現している（EVEREST, THE CRUEL WAY）。

また高度順化に触れ、ヒラリーのマカルー登山（一九六一年）の越冬順化も「かえって長期高処滞在には悪い」と結論を出し、年間単位の順化でなくては効力がない、としている。改めて速攻の効果を浮き掘りにするのである。

一九八二年は、ヒマラヤ登山の尖鋭化というか、スポーツ化にともない、記録への挑戦は、多くの日英の逸材を失ってしまった。ハント卿は一九八一年のAJ巻頭で「登山と危険」の一文を掲載、古くて新しい問題として登山家の注意を喚起している。基本的には、熟達者の判断によるとして、ヘルマン・ブール（オーストリア）も、ミック・バーク（英）さえもみずからの判断によってアンザイレンのない登山から死を招いたと指摘、また（危険防止は）原則論でなく（時、場）に応じた（適切な）認識として、いずれも個人の能力を強調、最後は、最近の傾向としてスポンサー（TV）がらみの登山の成功絶対視による危険を批難している。まして、山中のリーダーみずから、日本人的発想による人情がらみの激励は、異常心理にある高処の若ものにとっては逆作用になりかねない。来季はカモシカ同人隊が南北からのチョマランマ登山を中国、ネパール両国で同時期に展開する。

（片山全平）

ナンガ・パルバート
柱状東岩稜登頂（1）

一九八二・ヘルリッヒコッファー遠征隊

これは、前後十六回のヒマラヤ遠征のうち、ナンガ・パルバートをドイツの山として、或いは自己の山として、十回にわたって集中的に遠征したヘルリッヒコッファー博士の最後の遠征記録である。

一九八二年八日十七日、隊員のスイス人ウエリ・ビューラーの不屈な闘志によって柱状東岩稜より南峰登頂に成功した。いずれ詳しい報告が出されるだろうが、

また牧野さんにも声をかけたところ、是非同行ということになって十月八日の夜行で盛岡へむかった。

翌九日は曇天だったが、好摩から姫神山に登った。これは牧野さんと二人きりだったが、道も解り易いので昼近くには好摩に戻って中食をとるくらい余裕があった。ただ山頂は霧が深く展望もなかったので、一等三角点（丸い真鍮の新形式のもの）に手を触れ、嘉永二年と年銘のある石祠に賽しただけだった。

好摩の駅で佐藤、和田庄司君と合流、車で陸羽街道を北進、送仙（ソウセン）山という四七二㍍の小さな低山に登った。この山頂には三等三角点標石が僅か二〇メートルほどの距離をへだてて二個も設けられていた。国土地理院の武田満子さんにでも訊いてみたい事柄である。

その夜は七時雨山の山麓にひろがる田代平高原の七時雨山荘に泊った。ここは岩手支部の会員立花幹雄君の父君が建設した温泉つきのなかなか瀟洒な山荘である。夕食には牛肉とキノコの鍋物、若い熊の肉まで用意され、星空を仰いで明日の天候を期待しねむりについた。事実それから一週間秋晴れが続いた。

十日、車ノ走り峠までマイカーで行って、岩手支部会員十数名と共に紅葉の美しい七時雨山に登った。秋晴れの空のもと、この一等三角点の山からの展望は無類だった。南に巨きく岩手山がシルエットをえがき、その右に八幌平、北には明日登る予定の稲庭岳が秋色に飾られてよく見えるのだった。

帰途は、大部分の人が車を置いた関係で往路を戻ったが、立花君の案内で九名が薮こぎをしながら径のない尾根を直接山荘に下った。おかげでボリ（キノコ）がどっさりとれた。

夜は岩手支部の懇親会でもあって楽しい一夕を過ごした。特別番組は会員本田宏彦君のアンデスの民俗音楽（アンデスのハープ、アルパ・ケーナの演奏）であった。アンデスのメロディーから南部牛追唄までを楽しんだ。

十一日は早朝かなり強い風が吹いていたが、すぐ前の田代山へ登ろうと牧野さんがいうので、三時半に起床し、コーヒーとミカンをとっただけで四時五十分に出かけた。神戸恵子、鹿野松男、矢口重治、田鎖寿の四氏が同行した。最高点まで登ったが、そこより低い九四五㍍の三角点は薮がひどいのと強風のため割愛した。

朝食をしたためて山荘を発し、高曲原に至って車をとめた。クローム・イエローに染まったソウシカンバの林、灌木帯を登ること約一時間で稲庭岳（二等三角点）の山頂を踏んだ。展望は七時雨山と同様すばらしく、殊に五ノ宮岳、皮投岳は一段と近くなり心をひかれた。

これは速報として同博士より日本山岳会に送られてきたものである。

ヒマラヤ遠征史に、或いはナンガ・パルバート登攀史に、一区切りとなるであろうこの遠征記録は、執念の人、ヘルリッヒコッファー博士の隠退と合わせ、感概深いものがある。

（海外委員会・鈴木郭之）

＊

世界で最も急峻な四五〇〇㍍のルパール側壁を、一九六三年に、トニ・キンスホッファーと初めて偵察した時、私は壁というものは、到るところで弱点をもっているものだと確信することができた。私達はその壁を三つの異なった位置から調べてみた。即ち、南面、東面、西面からである。そして南西稜（キンスホッファー・ルート）以外にも登頂可能なルートがあるという結論に達した。私はタップ台地から柱状東南稜を直登するという考えに魅せられてしまった。その中でも特に柱状東岩稜ルートは、私にとって殊の他難しく思えた。その基部は上部バツィン氷河の三八〇〇㍍の地点で始まっていた。キンスホッファー・ルートを通っては、一九七八年、ハンネス・シェルに率いられたオーストリア隊が始めて成功し、一方、柱状東南岩稜は、私の第八回ナンガ・パルバート遠征中、一九七〇年六月二十七日と二十八日に、メスナー兄弟、フェリックス・クエン、ペーター・ショルツ等によって征服された。

一九八二年の今回の遠征で、ナンガ・パルバートの柱状東岩稜を登ろうと心を動かされた理由は色々とあった。七月八日、私達はバツィン氷河の左側のモレーンの下部に設けられたベース・キャンプに着いた。私は例によって、立案者であり、医者であり、カメラマンであり、遠征隊長であった。遠征隊のメンバーは、私の代理であり、これまでに八〇〇〇㍍に立った唯一人のメンバー、ドイツのショルシュ・リッター（私の一九七八年エベレスト遠征と一九八〇年カンチェンジュンガ主峰遠征の時）、並びに二度目のナンガ・パルバート遠征に参加したヴァレンティン・デムメル、それからハルトムート・ミュンヘンバッハ、ベースキャンプ管理者として女性のドリス・クスターマン、七月二十六日まで、遠征隊付医者をつとめたヨアヒム・ツァイツ博士。彼はかたわら、カラチからギルギットまで隊荷の輸送の世話をした。更に、この遠征隊には、ポーランド人、アンジェイ・ナポレオン・ビールンと、通称、テディと呼ばれたテデュース・ピトロウスキ、並びにスイス人、ウエリ・ビューラー、ギルギットからはパキスタンのナディル大尉が参加した。

私達はバツィン・ゴルジュに面している柱状岩稜の右側を登るルートを選んだ。一九七五年、既にこの柱状岩稜の左側を五八〇〇㍍の地点まで偵察していたが、雪崩の危険にさらされていると思われたので、このルートをとることは放棄していた。私達の直前に、この岩稜にとりついていたフランスのヤニック・セニュールは、柱状東岩稜の中間に通じるルートをとっていた。彼は殆ど七〇〇〇㍍の地点まで達した（セニュール隊はここで敗退した―訳者〈鈴木〉注）

柱状東岩稜はバツィン氷河から始まり、岩のような氷のスロープを越えて、不可能と思われるような線を描いて南峰に通じていて、ナンガ・パルバート主峰へは、まさに最短距離のルートである。上部バツィン氷河の三八〇〇㍍の高度にあるこの柱状岩稜の基部から、先ず、色々な困難度（二級から四級）をもつ岩頭を登らねばならなかった。この岩頭はずきんの形をしていたので、私達は「龍」と名付けたが、この岩頭は、バツィン・ゴルジュの北東壁から、殆ど一定の間隔を置いて落ちてくる激しい雪崩から第一キャンプへ登ってゆく私達を保護していた。第一キャンプのテントは、最初雪上に張られたが、後になって二〇〇〇㍍にわたる氷の溝「大クーロワール」の下部の

れた。

寛政五年の年銘をもつ御神灯石のある山頂で、暖かい秋の陽を浴びながら一時間以上もくつろぎ、車の所に戻って岩手支部の方々に別れをつげ、牧野さんと私は立花君の車で荒屋新町まで送っていただいた。そしてかねて約束していた秋田支部の会員石田明君に大館駅で迎えられた。石田君とは藤里駒ヶ岳へ行って以来だから八年ぶりであった。

十二日、朝一時パラついて雲が多かったが間もなく晴天となった。大館を石田君の車で出発し、渓谷美に豊む大川目川沿いの車道を北進した。美しい滑、糸滝、五色ノ滝など、岩手よりさらに紅葉の美しい景を眺めて荒沢登山口で車をおりた。西へ沢沿いに一時間足らず登って、田代岳から北走する幅広い主尾根に達し、緩傾斜の尾根を南進した。ブナ、コナラ、ミズナラ、ソウシカンバ、ナナカマド、ヌルデ、ヤマモミジ等の闊葉樹林帯なので黄葉紅葉の美しさは言わんかたなし。登ること一時間二十分で目を見はるような山頂湿原の一隅に達した。狐色の湿原のなかにコバルト色の瞳のような大小さまざまの池塘がちりばめられていた。一等三角点のおかれた山頂に着いたのは十一時十分、私は長いことあこがれていた山頂にしかも錦繡の美しいさ中に登れたことを心から喜んだ。その夜は石田君のはからいで大館老人福祉センターの温泉つきの宿に泊った。

十三日は晴れてはいたが雲がやや多かった。石田君の車で八時に出発。発荷峠から十和田湖畔に出て鉛山から登りだした。鉛山峠、ミソナゲ峠、九九七㍍三角点を経て、素ばらしい湿原を横切り一等三角点の白地山へ達したのは一時二十分、往復に約七時間半を要した。十和田湖畔は賑わっていたのに、この日も人ッ子一人に会うことなく、闊葉樹林帯の紅葉はここでも目を見はらせられた。殊に記憶にのこっているのは九〇〇㍍位の所でオンコ（イチイ）の雌株に紅い実がいっぱいなっていたことである。

十和田南の駅で石田君に厚く礼を述べて別れ、われわれ二人は花輪まで行って泊った。

十四日はまた秋晴れの好日を迎えた。花輪から八幡平まで列車にのり、そこから軽い荷で五ノ宮岳へむかった。途中に薬師神社が祀られている。二等三角点のある山頂まで、ゆっくり登って四時間足らず、途中の黄葉紅葉はここでも十二分に堪能させられた。

下山後、古くは大日堂と言われた大日霊貴神社に参拝して今日まで山旅の無事であったことにお礼を述べ、昼の食事をとって盛岡へむかった。そして瀬川屋旅館に投宿したが、そこは偶然にも佐藤君をよく知っているうちだった。

開けた部分にある岩の上に移された。

私達はクーロワールの左側を行きどまりまで登った。その真中辺の五八〇〇㍍の地点を選んで、ウエリ・ビューラーが、ショルシュ・リッターとハルトムート・ミュンヘンバッハの助けを借りて、第二キャンプとして二つのテントを、乾いたくぼみ状の地点に設けた。この第二キャンプは、当然のことながら、急な斜面のところに設けられたが、この大クーロワールの中ではいたしかたなかった。もっと良い条件でテントを張る可能性は皆無に等しかったので、私達は、小さなジグザグの形をした側面の雪原の終りにあるこの左側の岩の台地にキャンプを設営せざるを得なかった。第二キャンプをあとにして殆ど垂直の出口から出ると、この岩壁の中央の氷原へ続いていた。この氷原は「中央氷原」と呼んでもよいだろう。クーロワールの七〇度の急峻な出口は、落石の危険にさらされていて、私達のフンザ高所ポーター達にとって非常に危険であったので、第三キャンプへの荷上げは一回しか行なえなかった。

中央氷原でヤニック・セニュールのルートと行きかった。そこはセニュールが彼の第二キャンプを氷のこぶの上に設けたところであったが、二カ月後の今は、危険なぼろぼろのセラックになっていた。この氷状バルコニーの氷は、私達の遠征中、氷片となって、バッィン氷河に落ちていった。そしてその後には、ヘルメットやテント、その他装備類にキャンプ用具が残されていた。

私達は中央氷原に第三キャンプを設けた。そこは氷のクレバスのふちで五九〇〇㍍の地点であり、フランス隊のキャンプより一寸高いところであった。私達の二張りのハウザー・ブーメラン・テントは今までと違って至極安全な場所に設けられた。後になってこのキャンプは更に約三〇㍍くらいひきあげられたが、この第三キャンプは、第一、第二キャンプのような雪崩や落石の危険は感じられなかった。実際に、危険な時に、第一、或いは第二キャンプに誰も居合わせなかったのは、全くもって幸いという他なかった。このような危険との鉢合わせのために、第一と第二キャンプは、実に多くのテントの補充を必要とした。私達が行動を終えて帰着してみると、第一キャンプは夜に起こった巨大な雪崩で、岩頭から吹きとばされていたこともあった。或る時、私はバッィン稜の西のスロープのバッィン氷河の上、五〇〇㍍のところで、アイソ・マットを見つけたこともあった。それは、雪崩の起こす風で、数㌔メートル先のその地点まで吹き飛ばされたからであった。

七月三十一日、私達は、ビューラーとリッターによってひらかれ、確保された高さ五〇〇㍍、斜度六五度の急峻な氷壁を、始めて乗り越え、六五〇〇㍍の地点のセラックの間に第四キャンプを設営することができた。このキャンプには、最後のブーメラン・テントが張られた。後になってビールンは二つ目のテントを作った。かくして、第四キャンプは安全な場所に確保され、頂上攻撃の出発点となった。

八月十四日、ショルシュ・リッターは、第四キャンプを出て最初の氷原を進んだ。この氷原は行く手を岩にさえぎられた小さなものであった。この氷原の岩の近くの右側を横切って第二の氷原に出て、ここに第五キャンプを設営した。ポーランド人、テディ・ピトロウスキは、ショルシュ・リッターをサポートした。長い一日が終わって、二人共やっと七三〇〇㍍のキャンプのできそうな場所に到達した。約十九時間かかった。私達は下から彼等の行動を見守ることができた。この第五高所キャンプは質素で簡単なものであった。それは最低限の装備と数日分の食糧をそなえたビバーク・テントにすぎなかった。

（以下次号）

天気予報によると晴天は明日いっぱいで明後日はくずれるとか。われわれは今日まで六日間、休みなく登って、些か疲れてもきたしするので、今回はこれをもって打ちどめにすることとした。夜分、和田さんや佐藤さんが態々訪ねてくださった。われわれはゆっくり休んで翌十五日の昼汽車（新幹線）で帰京の途についた。

私は今までに、ここにかかげた三支部以外にも北は北海道から宮城、新潟、福島、静岡、山梨、東海、岐阜、福岡、東九州等の支部の方々に、山行の都度いろいろご厄介になってきた。そのことを書くのが目的の大部分だったのだが、十分意が尽くされていないような気がする。改めて満腔の謝意を述べて結びとしたい。

（一九八二、十二月）

図書紹介

親と子のネパール探険

田村真知子著

著者の田村真知子さんとヒサオさんには一九七九年に私がネパールへ出発する前に度々おめにかかっているので「親と子のネパール探険」は身内の誰かが書いたような親近感があり、最初から大変面白く読めた。田村さんの文章は読みやすいが、処どころネパール語が出るのでネパールに行かれたことのない方は戸迷うかも知れない。しかしこれは単なる民俗学的な本と言うより、いかに母親と子供達の暖い心の交流が、ヒマラヤの村々で自然を背景に、ほほえましく展開しているかといった、普通の紀行文ともまた違った味のある本だ。

われわれ日本人が見逃す、ネパールの人々の中に現代もあるカーストの問題や、人の好い日本の旅行者達に参考となるネパール人達への応待の仕方や扱い方などと、彼女ならではの鋭い観察があちこちに見られ、今後ヒマラヤの山々を歩きネパール人を雇う人々には非常に役立つマニアルになると思う。

題名の示す如く、この本は母性愛で書かれているので、どの頁をめくってもほほえましい母親の姿に接しられ、単に女性だけでなく男性のトレッカーも一読されることをおすすめする。

欲を言えば彼女のようにネパール語にたん能であれば、最後の数頁に簡単なネパール語辞典を付け加えたら、この本はネパール・ヒマラヤへ旅する人達のまたとない伴侶となるに違いない。また文中にもう少し詳しい地図があれば、この本の面白さにそそられてトレッキングをしようと思う人々のガイドブックになるかとも思われる。

昭和五十七年七月十五日　コンパニオン出版発行　二五八頁　定価千二百円

（佐藤テル）

径（ひとつ）——折元秀穂——

福岡まいづる山岳会

激情の人、折元秀穂氏の遺稿集である。氏は戦前を職場山岳会で活躍、なかでも阿蘇高岳北尾根の開拓に情熱を注ぎ、北尾根中の最難峰である鷲ケ峰に三本のルートを拓いた。そして同世代の多くの人達が辿った第二次世界大戦では中国で生活、敗戦とともに引き揚げ福岡市に居を構え、社会人山岳会である「福岡まいづる山岳会」を創立した。また、県山岳連盟の理事長、スキー連盟の事務局長をもつとめ、後進の指導と遭難防止に積極的に取り組まれた。

そのつれづれを会報、山岳雑誌等に掲載されたものを他日を期してまとめられていたが、ガンのため終りを得ず、念願しながらも果たし得なかった随想集を、故人が創立された山岳会の会員、縁りの人達により故人を偲んで刊行されたものである。

本は、八章六〇編から成り、第Ⅱ章にはとくに氏が青春の情熱を傾け開拓した「阿蘇の岩場」鷲ケ峰西稜、鷲ケ峰北稜、鷲ケ峰北壁がまとめられ、先蹤者のパイオニアワークの鼓動が伝わってくるようである。

第Ⅶ章に「私たちの山荘」がある。折元氏主宰のまいづる山岳会の有志が共同で建設された山小屋である。九州の岳人は九重に始まり、九重に終わる、ともいわれている。折元氏も昭和五十六年四月十八日会員とともに過ごされたこの山荘が最後であった。

最後の第Ⅷ章は追悼と折元秀穂登山関係略年譜。編集顧問の津田欣一氏が、「径ひとつ・解題にかえて」として「戦前の折元さんと同時代の何人かの先輩にふれるのに比重をかけた」、また、「阿蘇の岩場の開拓についても、強く求められぬ限り、三本のルートの初登はん者であることさえ語ろうとしなかった故人のためにも、私は戦前の記述に重点を置くようにこころがけた」とある。

昭和五十七年三月　福岡まいづる山岳会発行　B6版　三〇二頁　定価二千二百円（稲永　篤）

エベレスト西稜

明大エベレスト隊編

一九八一年春のエベレスト西稜を攻めた明大隊の正式報告書である。明大創立百年記念事業として植村直己氏のアコンカグア、冬期エベレスト登山に次ぐ三番目の計画で、七十二歳の本会永年会員交野武一氏を総隊長に、中島信一隊長以下十九名の隊は四月二十四日ベース・キャンプに集結、西稜沿いにキャンプを進め、八一〇〇㍍の第五キャンプから四次にわたって頂上への攻撃をかけた。第一次攻撃は五月十六日（松田、中西）、第二次は十七日（田中、ペンパ・ラマ）、第三次は五月十九日（松田、三谷）、そして第四次は翌二十日（田中、田口）によって行なわれたが頂上まであと九十八㍍を残して涙を飲んだ。最高到達点は八七五〇㍍。

中島隊長は第四次アタックについて書いている「八七五〇㍍到達、午後三時三十分。田口は完全に登攀は不可能な状態であったが、田中は元気いっぱいであった。この地点から頂上まではすでにアメリカ隊、そして一九七九年プレのユーゴ隊、さらに一九八〇年プレにホーンバインのクーロアールを登り西稜上部から登頂したJACチョモランマ隊の尾崎、重広隊員らがたどったルートで困難さはさほどないはずである。時間的に見ても田中一人で登ったとすれば、午後六時ごろには頂上へ達したかも知れない。だが田口は——くやしさは残るが、MACのセーフティ・ファースト登山からすれば〝撤退〟の二字は当時の状況では正しかったし、当然であったかも知れ

ない。しかし一年後の今日においては、そうとも思えないのが実感だ」

これがこの登山について、すべてを語っているように思う。一つの登山団体が世界最高峰をねらい、四回も繰り返しアタックした執念には胸を打たれる。この報告書を贈られたとき、私は交野、中島両氏に「登ったも同然の登山だ」と書いた礼状を出した。エベレスト登山報告書として後世に残る貴重な文献の一つである。

昭和五十七年十月一日　明大エベレスト登山隊発行　二四六頁

非売品　頒価四千円（送料五百円）入手希望者は〒183府中市宮西町5－4－1中島信一あて申し込めばよい。

（山崎安治）

種蒔きうさぎ

武藤清次遺稿集編集委員会

山を通じて久しくお付き合いしていた福島支部の武藤清次さん、俗称ムーさんが一昨年の五月三十一日、月山の残雪のさなかで心臓発作で急逝された。隣県の良き岳友として親しかった関係もあり、僅か五十八歳で逝ってしまった武藤さんの死は劇的な感じさえする。最後となった月山山行の往路山形市に後藤幹次さんを訪ねられたが「今生の別れの挨拶に来たようなものだ」と後藤さんは述懐されている。余りにも突然の死だったが、残雪まばゆい雪の月山の一角で、同行の親しい山男達に見守られ永遠の山旅に発たれたのは、山と友をこよなく愛したムーさんの本懐だったのではないか。

そして一ヶ年後、武藤さんを慕う福島支部の多くの岳友の手によって、遺稿集「種蒔きうさぎ」が出版されたのである。五月三十日、市民会館で行なわれた一周忌の追悼会の折に贈られた遺稿集は、五一六頁にも及ぶ大冊で、第一章の私のアルバムにはじまり、私の詩集、種蒔きうさぎと章がすすめられ、最後に家族に残された故人の思い出が奥様やお子さんの手によって綴られている。仙台高工の土木工学校を卒業、大志をいだいて満州に渡り、終戦、ソ連抑留と続いた異国での孤高の生活を、持って生まれたムーさん独特の人生観で書き連ねている。そしてムーさんは詩人であり、酒人であり、激情と楽天の両面をそなえている家庭人であったことも窺える。古くは幼少時代の遊び仲間や恩師の追憶の記から、後半山に囲まれた日常など、常に家族ぐるみの生活はムーさんの人間性を余すところなく画き、流石ムーさんならではの感を深くするのである。三人の妹さんの思い出話では、随分とやんちゃ坊主で、自転車が欲しくてハンストをやりご両親を手こずらせたこともあったらしく、面白い。酒豪であったことは自他共に認めるところで、職場ではまるで砂に飲ませているようなものだと評されていた由、私も身につまされる思いがする。山に行く前日は子供のようにはしゃいでいたものだとお子さんが述べている。

山と酒と詩と人を大事とする人生観で過ごしたムーさんの生涯記である「種蒔きうさぎ」は、山と酒と人を愛する総ての人達に何ものかを呼びかけてくれるものと思う。書題も吾妻山群を見上げながら生まれ育ったムーさんが、残雪のうさぎの雪形になぞらえ、しかもその時期の残雪に逝った、ムーさんにふさわしい題名と言える。

先に福島支部では五十二年二月に「吾妻小屋日記」の大冊が、続いて故伊藤弥十郎前支部長の遺稿集「アッシュの杖」が五十五年十二月に出版されている。その文中でムーさんは「五十二年九月六日の夜伊藤さんの容態が急変したからすぐ病院に来てくれ…あの温顔はそのままで既に幽冥境を異にしていた」とつづっている。いまその後を追って武藤清次さんは逝った。今年も五月の命日が近づく頃吾妻の山腹には種蒔きうさぎが現われることであろう。

昭和五十七年五月三十一日　武藤清次遺稿集編集委員会発行

（伊達篤郎）

〈科学研究委員会講演会〉

山はどうしてできたか

――比良山を例として――

大阪市立大学理学部地学教室

講師　藤田　和夫氏

「山はなぜ高くなったのか」という子供が何気なく発するような質問が意外に難問なのである。今までの地質学や地形学は、「山はどのようにしてできてきたか」ということに対しては、ある程度答を用意できたが、この難問にはまだ答えきれない。しかし「なぜ山ができたのか」という質問には、ある程度のことがいえるようになったのだが、それはこの二十年ばかりの間急速な変貌をとげた地球科学のおかげである。

比良の山頂部には八雲原の湿原の存在でもわか

・報告・

比良地形探索山行

〔日時　十月十六日（土）、十七日（日）〕

科学研究委員会主催・関西支部共催

今夏来悪天の週末が多く、天候が案じられたが、絶好の山行日和りに恵まれ、関西支部の全面的なご援助の下に、比良の秋を心ゆくばかり味わうことができた。

十六日、湖西線の比良駅からリフト前までバス、リフト、ロープウエイと乗継いで夕刻比良ロッヂに全員三十五名集合。夕食をともにして小憩後講演会。中村科学研究委員長の挨拶の後、大阪市立大学の藤田和夫先生の講演「山はどうしてできたか」（要旨別掲）を伺う。先生がご自身で歩かれ、撮られたスカンジナビア、ヨーロッパ・アルプス、カラコルム、中国、米国並びに日本の豊富なスライドによるお話は内容的には高度のものであったが、大変わかりやすく話して下さった。最近の地球科学の目覚しい進歩は印象的で「山が何故そこにあるか」という登山科学の第一歩ともいうべきものを学ぶことができた。

九時過ぎから参加者の自己紹介をかねて懇親会を開き、関西支部の方々が荷上げして下さった豊富な飲物、肴で、夜半まで歓談の時が続いた。

十七日、昨日の強風もすっかりおさまって、無風快晴の朝を迎える。ロッヂ前で全員の記念撮影をすませ、九時すぎ出発、八雲原の湿原を経て、武奈岳に向かう。十時すぎ、標高一二一四㍍、比良の主峰武奈岳に到着。山頂から昨夜の講演で伺った琵琶湖側、比良山地、大津側の地形の関係をこの眼

るように丘陵的なゆるやかな地形がひろがっていて、比良ロッヂはその片隅にある。しかしロッヂに至る琵琶湖側の山腹は、ケーブルカーもつけられない急斜面で、いたるところガリーが見られる。また西側の安曇川の谷への斜面はさらに急で、山頂から谷底が見えないくらいである。

山は高くなるほど浸食作用がはげしくなって、やせ尾根になるはずであるから、八雲原は比良が高くなってからできた地形とは考えられない。これはかつての琵琶湖の水面に近い位置で平坦になり、その後に隆起したものにちがいないから隆起準平原と呼ばれる。武奈岳がこの平原面から突出して最高峰になっているのは、過去の準平原面の中での古い丘陵だったからで、残丘（モナドノック）という。

それでは比良山地はどのようにして隆起してきたのであろうか。そのメカニズムは山地両側の急斜面が暗示している。山地の根元にあたる部分を調査してみると、山麓に沿って延びる大きな断層が発見される。断層とは地球の表層の部分に発生した割れ目で、岩盤のくいちがう境界面にあたる。比良の場合は圧縮性の割れ目で、その断層面を境にして比良をつくっている花崗岩のブロックがくさび状にしぼり出されるように上昇してきたのである。東側を比良断層、西側の安曇沿いを花折断層という。

これらは逆断層という型の断層で、断層面が山地の内側の方向に傾斜しているので、本来なら山腹面はオーバーハングになるはずであるが、実際には山が隆起するにつれて浸食されるので、急斜面をつくりながら山麓に巨大な扇状地をつくったのである。したがって山腹斜面は変形した断層崖といえる。

それではなぜこのような部分に圧縮作用が加わったのであろうか。この問題もこの十五年ばかりの間に劇的な発展をとげたプレートテクトニクスと呼ばれる学説によってある程度説明ができるようになった。

比良山地はほぼ南北に延びる。この方向の細長いブロックが隆起するということは、東西方向に圧縮作用が加わっているということを意味する。そして同様な構造を東へ追っていくと、飛騨山地を経て、東北地方から遂には日本海溝に達するのである。

プレートテクトニクス説によれば、太平洋の海底を構成する厚さ約百キロメートルの「板状の岩盤」が日本海溝に沿って日本列島の下にもぐり込む。この圧縮力によって日本列島は縮みながらうねりを生じ、また破壊して断層という名の割れ目ができる。そして岩盤が割れる時に発生する波が地震だというのである。

比良山地も、太平洋プレートの圧縮によるうねりの両端に近い高まりだということができる。このうねりがいつ頃から始まったかということも最近見当がついてきた。その成果によると、開始は約百万年前、そしてその大部分は約五十万年前から急速に断層を伴う隆起が始まった。こういうと非常に古い話と思われる方もあろうが、人類史が三百万年にもなってきたのであるから、人類の活動舞台の中で生れてきた、世界でも最も新しい山なのである。

その隆起の速度は平均すると年一ミリ程度であるが、毎年じわじわと上がってきたものではなく、エネルギーをためておいて一挙に数メートル上昇するということを繰り返えしてきたとみられる。その時には大地震を伴ったにちがいない。比良の両側には歴史地震の記録も多い。これが息の長い地球の変動の実態なのである。詳しくは藤田和夫著「日本列島砂山論」（小学館 創造選書六八〇円）をご覧いただきたい。

武奈岳からわさび峠を経て安曇川支流、ロノ深谷の源流付近で大休止、昼食をとり、金糞峠には予定より早く、一時すぎに到着する。途中の紅葉は丁度見頃で、比良の秋を満喫できた。休日のことで家族連れや団体のハイカーも多かったが、道中ごみが少なかったのは嬉しい。

金糞峠で解散。比良ロッヂに戻る組、堂満岳を経由して下山する組と別れ、正面谷の急斜面を下山、イン谷口からバスで比良駅に戻る。

この山行は企画の始めから、宿泊先との交渉、事前現地調査、山行当日のお世話に至るまで、関西支部の全面的なご援助によって無事終えることができた。今西寿雄でたしかめることができた。

秋山山行・御在所岳

東海支部・集会委員会共催

十一月十九日（金）の東京駅二十三時二十五分発大垣行き普通列車に集合したのは、先発隊の精鋭（？）六名。土曜日もフルに登ろうという精力的な面々だ。

早朝の名古屋から近鉄四日市へ出て、近鉄湯の山線に乗り換え、湯の山温泉駅へ。駅前で朝食をすませてタクシーに分乗、鈴鹿スカイラインの最初のトンネル手前、蒼滝付近にかかる橋のところで車をすてる。橋のたもとに指導標があり、三交湯の山温泉からきている藤内沢への道、裏登山道にでる。川沿いに行くこと十分程で今晩の宿、日向小屋があった。会員の梅田浩生氏所有の小屋で、主に休日に小屋を開いているとのこと。

荷を置き、身じたくを整えて、いざ出発。いよいよ名高き御在所の岩場へ……。東海の岳人のよきゲレンデ藤内壁は、昔、近くにあった三岳寺というお寺の僧がざんげのためにかよった場所だという

支部長、阿部和行幹事の数々のご配慮、また科学委員会と連絡、準備、運営の任にあたって下さった安井康夫氏をはじめ関西支部の役員の方々に心から御礼を申上げます。

参加者・順不同（関西支部役員）
阿部和行、久野英一郎、磯部幸則、中谷絹子、安井康夫、南川博茂、杉本秋之介、小林治俊、三上智津子、（一般参加者）菅野弘章、高田真哉、遠藤光男、麦倉啓、中村あや、安土武夫、織田沢美知子、丸茂キクエ、川北仁、富田郁夫、岩堀瑞子、篠崎仁、守田治夫、石川学、入谷浩右、大野規子、渡辺正臣、山崎健、（科学研究委員会）中村純二、小西奎二、梅野淑子、斎藤桂、千葉重美、同Jr、高橋詢

（高橋 詢）

いわれのあるところとか。確りしたすばらしい花崗岩で、前尾根中尾根、一の壁、正面バットレス等、各ルートは変化に富んでいて、それぞれ独自の魅力を持っている。

今日はご馳走の待つ頃までに小屋へ帰り着けばいいのだからと、各自の力量に合わせてのんびり前尾根の各ルートと藤内沢の岩場の眺めを楽しみ、観光客でにぎわう山頂に出て、宴の前のビールをまず一杯。ほろ酔い気分で裏登山道を下り日向小屋へ。東海支部の方々や東京後発のメンバーがそろうまでの間に、またまた地元のお酒とウイスキーに舌鼓をうつ。七時、いよいよ懇親会が始まった。集会の河村理事、東海支部長の尾上昇氏および湯浅道男氏のあいさつ、出席者の自己紹介と続き、その間にもスキヤキの鍋に伸ばす手の絶えることなく、盃に注ぎ合う初顔合わせの方々、知己の人達の会話がはずむ。お酒の量も進むごとに宴はにぎやかになり、山の歌あり、尾上氏のロシア民謡あり、夜のふけるまで交流はつきなかった。

翌朝、小屋の前で全員記念写真を撮り、都合で帰る方々に見送られながら藤内壁へ。東海支部の方々とザイルを組み、全員で前尾根を途中まで登り力試し。昼食の後一の壁へ移動、一枚岩を立てたような岩壁だが、足場は確りと安定していて、見た目ほどの不安感はない。二ルート、三ルート、トラバースルート等、細かいホールドのフェース・クライムを楽しむことができた。

二日間のクライミングを楽しんだ下山組は、快適だった岩場に別れを惜しみつつ下っていった。残留組の四名は、日向小屋に二泊して藤内壁にかよいつめ、御在所の岩を十分に堪能したようである。

最後に、お世話になった日向小屋の梅田氏に感謝すると共に、東海支部の方々、愛知学院大学の方々、集会委員の方々にお礼申し上げます。

〔参加者〕（東海支部）尾上支部長、小川（四名）、和田、柿下、湯浅、伊藤、水谷、浜谷、池沼、（愛知学院大学山岳部）高村、藤田、石田、野々川、北井、山羽、（東京・集会委員会）河村理事、村木委員長、入沢、梅野、砂田、佐藤、若林、神山、渡辺、前田　以上二十八名

（佐藤知恵子）

北海道支部忘年会

北海道支部忘年会は、十二月十一日（土）午後五時三十分より、札幌、北大植物園前のフジヤサンタスホテルで開かれ、大塚支部長始め三十二名が出席。申込より十名オーバーで盛大に行なわれた。

先ず、大塚支部長より支部長会議の報告を兼ねた挨拶、続いて朝

日山協推せん状取得手続について（つづき）

パキスタン登山に必要な手続き

一九八二・十二・一現在

◎推せん状交付申請に必要な書類（登山隊が用意するもの）

1　東京都山岳連盟提出分

一、海外登山推せん状交付申請書（所属団体代表者名・JAC会長名）　一通

※JACに加盟している団体はこの他に派遣する団体代表者名　一通

二、誓約書（登山隊長名）一通

三、削除

四、和文計画書（所定の項目が盛込まれているもの・B5版）　二〇部

五、英文登山許可申請書（アブリケーション）　コピー　一部

六、削除

2　（社）日本山岳協会提出分

一、海外登山推せん状交付申請書（登山隊を派遣する会の代表者名）　二通

※JACに加盟している団体は他にJAC会長名のもの　二通

二、誓約書（1と同じ）　二通

三、削除

四、和文計画書（計画の経緯・隊員の山歴が盛込まれているもの）　二〇部

五、英文登山許可申請書（アブリケーション）隊員顔写真は不用　本文　一部　コピー　一部

六、削除

3　パキスタン大使館提出分

一、英文登山許可申請書（アブリケーション）部数は年によって変更ある。

二、推せん状・英文　一通

※登山する年の前年一月一日～十月三十一日まで大使館で受付ける。

4　外務省提出分（提出先・情報文化局文化第二課「担当官・小菅吉治氏」）

一、和文計画書　三部

二、英文登山許可申請書（アブリケーション）　コピー　二部

三、推せん状（和文）（正）　一通（和文）（写）　二通（英文）（写）　二通

四、あいさつ状（派遣する会の代表者名）　一通

五、念書（登山隊長名）　一通

※推せん状交付手数料の取扱いはネパールと同じ。

4．隊員名簿

氏名（ふりがなをつける），担当係名，生年月日，住所，電話番号，勤務先，勤務先電話番号，登山歴

※登山歴は，主要山行歴（年度を含む）5つ程度，冬山経験年数，全海外山行歴を記載すること。

5．登山隊事務局（登山隊出発迄の場所）及び留守本部，連絡担当者名，住所，電話番号，夜間の連絡先電話番号，また現地への宛名が既定ならその宛先

※この計画書を発行する責任者の名称又は氏名，住所，電話番号を奥付けに明記して下さい。また，上記は最低限の必要事項であり，上記以上の内容については，各隊の個性を生かして記載されることは自由です。

○　○　○

その他

イ．和文計画書は都岳連用 20 部，日山協用 20 部が必要です。

ロ．海外登山推薦状交付手数料は，日山協 20,000 円です。

ハ．都岳連の海外委員会は原則として毎月最終火曜日に開かれますので，申請書の提出は毎月 15 日までにお願いします。

ニ．海外委員会で審議の時には隊の全体がわかる方に出席説明していただきます。

ホ．都岳連の推薦状交付手数料は直接加盟団体は無料。間接加盟団体は 10.000 円。

比奈評議員の乾盃。支部山行ニペソツ山、支部十五周年記念山行知床羅臼岳登山計画、ヒマラヤトレッキング計画の報告等あり、更にワンポイント・スピーチで自己紹介をし、会場はこの上もなく盛り上がる。

事務局移転については皆様より多大のご芳志を賜わり厚く御礼申し上げます。

二次会は、おでんの『かつや』三次の『鶴』、と多数の会員で、サッポロの師走の夜を華やかに彩った。

出席者・順不同 大塚武、兼平治水、山川力、朝比奈英三、橋本誠二、横江一郎、金井五郎、山本良三、佐々木孝雄、渡部盛夫、井手貴夫、浅利欣吉、及川敬一、加藤正己、石崎貞子、佐々木喜一、本多矩、横田春雄、赤石喜恵子、亀井秀子、柳田涼子、三浦勝幸、石井忠雅、久保田優一、水科行雄、沼崎勝洋、川越昭夫、牧野昭蔵、成田志登美、木下恵子、新妻徹、平野明

会務報告

12月理事会

12月6日午後6時30分
本会・ルーム

出席者 佐々会長、渡辺、田口副会長、伊丹、神崎、西村、田村、小倉、中村、高本、菅沢、川上、岡沢、赤松、松家、河村各理事、太田、小倉各監事

欠席・委任 高橋、大倉、水野、鈴木各理事、村木、大塚、松丸、小原、佐藤各評議員

⊙報告事項

▽総務担当、年次晩餐会（参加三七〇名）の結果の報告の外八件ほどの報告があった。

⊙了承事項

▽財務担当、過日、会員外の榎本一郎氏より本会に対して、「登山界の発展のための一助として」という主旨の寄付をうけた。これを別途会計扱いで保管したいと提案、この件了承。

▽自然保護委員会、南アルプス北沢峠の林道修復工事停止を会長名で関係機関に求める要望書を提出したいという提案、この件了承。

▽佐々会長、去る十月のUIAA集会に参加したとき、ネパール山岳会からJACがUIAAに再加入してはという要請があった。これを検討してほしいという提案。JACの現状をUIAAに報告してある。その返信をまってから、理事会で再検討することで了承。

1月理事会

1月10日午後6時30分
本会ルーム

出席者 佐々会長、渡辺、田口副会長、田村、神崎、西村、高本、岡沢、松家、小倉、川上、高橋、中村、水野、大倉各理事、太田、小倉各監事

海外登山推薦状交付申請書に添付する「登山計画書（和文）」の内容について

（都岳連）

和文計画書によりその登山の全てがわかるようにするため最低限下記の事項を記載して下さい。

用紙サイズはB5版とし項目の順序もおおむねこれに従って下さい。

1. 表　　紙

山名，山の高さ（書けない場合は○○○計画書とする）。
登山実施年
派遣母体名

2. 登山するに至った経緯（文章）

内容として，イ．登山隊ができあがった過程，ロ．その山を選んだ理由，ハ．隊員の構成要因，ニ．登山の目的等を盛ったもの。これらを 2,000 字以上の文章でまとめて下さい。（別刷りはしないで必ず計画書に入れて下さい。）

3. 登山計画概要

山の登山史を含む（文章）

Ⅰ 目的（山名，高さ，ルート名を含む）

Ⅱ 隊員の名称，英文，和文及び英文略称

Ⅲ 隊の構成

隊長	○○○○1名
隊員	○名
医師	1名
リエゾンオフィサー	1名
コック	○名
ハイポーター	○名
ローカルポーター	約○名
その他	

Ⅳ 日程（できるだけ詳しく）

（例）

1979年2月初旬	先発○名成田発
― ―	― ―
― ―	カトマンズにて全員集結
― ―	キャラバン開始
― ―	BC設営○○氷河 約○○○m
― ―	― ―

Ⅴ キャラバンルート図，登攀ルート図

図中にベースキャンプ予定地に「BC」の文字を記入すること。（申請時に予定ルート入りの山の写真を添付すること。……キャビネ判以上1部）

Ⅵ 予　　算

収入，支出（国内払い，国外払い，）（明細がわかるように）

（例）

国内支出			
渡航費	円×	人=	円
輸送・梱包費	円×	kg	円
装備費			円
食糧費			円
医薬費			円
保険費			円
事務費			円
登山料			円
その他			円
計			円
国外支出			
滞在費			円
輸送費			円
装備費			円
食糧費			円
人件費			円
登山費			円
予備費			円
計			円

お知らせ

◎行事案内

☆スキー登山技術講習会開催について

スキー登山技術講習会を妙高高原周辺で行なうことになりました。参加希望者は日本山岳会ルームまでご連絡ください。

日時　三月十九日(土)～二十一日（月）で前夜発の三日間

場所　妙高高原周辺

募集人員　三十名

募集〆切　二月末日

準備会　三月十一日（金）午後七時、JACルーム

参加費　二〇、〇〇〇円（交通費別）

指導講師　松永敏郎他。

※詳細は事務局まで。会員外でも会員の紹介があれば受付けますから振ってご参加下さい。

指導委員会

◎会室行事案内

☆海外委員会の講演会

・三月三日（木）「長谷川恒男氏の話」

・四月七日（木）「カナダ山岳情報」黒川　恵氏

☆第十一回　山岳史懇談会

日時　三月十日（木）午後六時

場所　ルーム・集会室

講師　海野治良　氏

テーマ　RCC時代の山登り

今回は海野治良氏をお招きし、RCC同人として大正の末から昭和の初期にかけて、本格的な登山や山の運動具店「好日山荘」を創設した話しを中心に伺います。

図書委員会

☆新入会員オリエンテーション

三月二十六日（土）午後二時より行ないます。山岳会の歴史や各委員会の活動、会室使用について等説明した後、会員懇談会を行ないます。この一年間に入会された東京周辺の会員には御案内をお送りしますが、そのほかの会員も参加できます。

総務・集会委員会

☆定例集会

・三水会例会　三月十六日

・会員懇談会　四月二十五日

問合わせは各委員会、または事務局、集会委員会まで。

◎北海道支部十五周年記念山行

知床半島羅臼岳登山について（第一報）

知床国立公園、シレェ・トゥ（山地の先、また地の涯ての意アイヌ語訳）はわが国の最東北端にあり、今も原始美の魅力に満ち、北にオホーツク海、南に国後島があり、羅臼岳（一六六〇㍍）からは爺々岳（一八二二㍍）が望まれる。そして、オホーツク海、太平洋側の国後水道は、海産物の宝庫である。

○日時　昭和五十八年七月二日（土）～四日（月）三日間

○場所　北海道斜里郡斜里町宇登呂＝岩尾別＝目梨郡羅臼町一帯

○日程　七月二日（土）札幌発　午前八時、斜里駅前　午後五時、ウトロ　午後六時、懇親会　午後七時より。《ウトロ泊》

七月三日（日）起床　午前六時、出発　午前七時、羅臼岳山頂　正午、羅臼温泉到着　午後四時、登頂祝賀会　午後六時より。《羅臼泊》

七月四日（月）午前八時出発し弟子屈、阿寒湖畔、帯広、日勝経由で札幌着　午後七時。

○会費　三万五千円の見込。交通費、宿泊費、食費等を含む。

○定員　八十名

○申込締切　六月十日

但し申込多数のときは、先着順とします。

○申込みは、予納金一万円を添え、北海道支部事務局へ

〒061－01　札幌市白石区厚別中央一条七丁目一五ノ一ノ四一〇　平野明方　日本山岳会北海道支部

（電）〇一一－八九一－九二三七

※　宿舎、バス等、折衝中です。第二報でお知らせします。また天候、道路状況により、日程、費用等を変更する場合があります。

◎カンチェンジュンガ峰縦走計画

会の仲間が集まって、全力でぶつかれるような登山をやろうという気運が、また盛り上がってきました。今回の計画はカンチェンジュンガの南峰、主峰、西峰を結ぶ縦走を目的とするもので、現在、若手の会員有志を中心に、基本計画の検討を進めております。意欲ある会員の、さまざまな形での参加を期待しております。詳細は事務局までお問い合わせ下さい。

（鹿野勝彦）

委任　伊丹、菅沢、赤松各理事、松丸、佐藤、村木、大塚、小原各評議員

⊙報告事項

▽連絡事項四件（総務）

▽「山日記」編集スケジュール（小倉）編集関係の仕事を担当する役員の交替について留意してほしい。

▽五十八年度役員交替は理事八名、評議員八名、監事一名の見込み、候補を考えてほしい（総務）

▽五十八年一月－五月行事予定表（総務）総会は五月二十一日。

▽五十八年度事業計画、予算案の作成手順（財務）五十七年度会計の推移、例年並みに進行中。

▽八十周年記念事業準備委員会と山岳基金（仮称）委員会の発足について準備中である（会長）。委員候補を申し出てほしい。

▽五十七年、秩父宮賞の受賞者は五百沢智也会員（総務）

⊙審議事項

▽自然保護委員会編集の「フィールドマナー・ノート」を印刷して全会員に配布したい。　了承

▽韓国訪日登山隊の身元引受けをJACが担当する。　了承

▽年次晩懇会々計報告　了承

ルーム日誌（57年12月）

2　日（木）青年懇談会、指導委

4日（土）支部長会議、

年次晩餐会
（ホテル・ニューオータニ）
7日（火）ボゴダ登山隊報告会
9日（木）青年懇談会
11日（土）忘年会
15日（水）三水会、会員懇談会
16日（木）図書委、青年懇談会
17日（金）科学委
18日（土）青年懇談会
20日（月）80周年準備委
21日（火）自然保護委
23日（木）フィルム委
今月の来室者　476名
会員移動（12月）
代表者変更
6155　立教大学理学部山の会代表　内田芳宏
物故
11779　熊沢正夫（11・5）
7980　宮後正樹（10・）
名誉会員
529　麻生武治
806　野口末延
1247　中屋健弐
1696　竹節作太
永年会員
1361　渡辺武男
1396　初見一雄
1405　増本　茂

お知らせ

IMS会長
アイヴス博士講演会
日時・場所　三月二日（水）午後六時半より、ルームにて
題目　『コロラドの雪崩の研究』
科学研究委員会
海外委員会　共催

＊

『山の話』―チョゴリ―
日時　三月二十六日（土）午後五時三十分より
場所　私学会館（市ケ谷駅下車）二六一―九九二一
講師　小西政継氏
日本山岳協会喬戈里峰登攀隊隊長

会費を納入して下さい　事務局

昭和五十八年二月二十日発行
102　東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　佐々保雄
編集代表　岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三―四八二九番
印刷所　東京都港区赤坂一丁目三番六号
株式会社　技報堂